

イントロダクション その1

■はじめに

今月から、「ヘブル人への手紙」を学びます。中川先生のメッセージ・シリーズ「ヘブル人への手紙」とフルクテンバウム博士のバイブル・コンメンタリー「ユダヤ人信者に宛てた書簡：ヘブル人への手紙、ヤコブの手紙、ペテロの手紙第一・第二、ユダの手紙」に基づきます。本日は、イントロダクションです。ヘブル人への手紙の全体像を、本日と次回8月27日の2回にわたり、学びます。

■「ヘブル人の手紙」について（イントロダクション その1）

1. ヘブル人への手紙の著者は誰か

- (1) 名前が記されていないので、特定できない。
- (2) ユダヤ人であると推定される。
 - ① 神のことばは、ユダヤ人に委ねられている（ロマ3:2）
 - ② この手紙の内容、特にヘブル語聖書（旧約聖書）からの引用やユダヤ的習慣についての理解度から判断すると、ユダヤ人である。
- (3) 第二世代の信者である（ヘブル2:3~4）
- (4) よって、著者は、第二世代のユダヤ人信者である。

2. 受取人たちは誰か

- (1) この手紙の中から受取人については、次の7つのことがわかる。
 - ① 2:3~4 著者と同じく、第二世代の信者である。
 - ② ユダヤ人である。著者が頻繁に旧約聖書を引用するのは、受取人が旧約聖書を重んじるユダヤ人だからである。ユダヤ人の中での論争に決着をつけるのは、旧約聖書にはどのように書かれているか、である。
 - ③ 3:1、12「兄弟たち」、6:9「愛する人たち（愛されている人たち）」、3:1「天の召しにあずかっている人たち」、これらの表現から受取人は、信者である。
 - それも、ユダヤ人信者である。この手紙の中で著者が指摘する危険とは、「ユダヤ教に逆戻りする」ことである。もし異邦人信者であれば、ユダヤ教に戻ろうとは思わない。
 - この手紙の中では、5回の警告がされる。たとえば3:12~13「悪い不信仰の心になって生ける神から離れる」、「罪に惑わされてかたくなになる」といったことは、受取人が信者であることが前提の警告である。
 - ④ 5:11~14 「年数からすれば教師になっていなければならない」→信者としての経験年数は長い。
 - ⑤ 5:11~14 信者になってから長期になるが、霊的にはまだ幼子の状態にとど

まっている。

- ⑥ 10:23~26 迫害のゆえに信仰が動揺している。「ことさらに罪を犯し続ける」とは、故意に確定的・継続的に罪を犯すという意味で、過失や弱さによってつい犯してしまうような罪ではない。特に、この手紙の文脈では、ユダヤ教に戻ることを指す。

- ⑦ 13:19 受取人は、著者と面識がある。

3. 受取人たちはどこにいたか

(1) 次の2箇所は、可能性がない。

① エルサレム

- 2:3 受取人たちは個人的にはイエスを見聞きしたわけではない。エルサレムにいたとすると、この手紙は、エルサレム教会の信者の中で、イエスを個人的に見聞きしたことのない信者たちに宛てられた、となるが、それは考えにくい。
- 6:10、10:34 受取人たちが「聖徒たちに仕えた」「今も仕えている」というのは、エルサレム教会の貧しい信者たちを経済的に支えたことを示す。(使徒 11:29、ロマ 15:25~27、I コリ 16:1~3)
- 12:4 受取人たちの間では誰一人、迫害に抵抗して血を流した者はいない(=殉教した者はいない)。これはエルサレム教会にはあてはまらない。エルサレム教会は、ステパノ(使徒 7:59~60)、使徒ヤコブ(使徒 12:2)、そしてこの手紙が書かれるまでの時期に、主の弟ヤコブが殉教の死を遂げた。

② ローマ

- 2:3~4 ロマ 1:6~15、15:20 受取人たちは、「それを聞いた人たち=イエスが語ったことを聞き、イエスが行ったわざを実際に見た証人たち」、すなわち、使徒たちによって福音を伝えられた。しかし、ローマの教会は、使徒によって建てられた教会ではないと推定される。ロマ 1:15でパウロはローマの教会に福音をより詳しく伝えようとしており、他方、15:20では他人(=他の使徒)の土台の上に建てることはしないと言っている。ということは、ローマの教会は他の使徒が建てた教会ではない。
- 受取人たちは、エルサレムの神殿での祭儀に戻りたいと切に感じていた。このような状況は、ローマにいたユダヤ人信者には当てはまらない。ローマはエルサレムからあまりに遠くて、そのようなことを思いもしなかった。

(2) 最も可能性の高い地域・・・エルサレム周辺のユダヤ地方の諸教会(ガラ 1:22)

- ① この手紙が書かれた当時、ユダヤ地方においては、教会の信者たちは厳しい迫

害にあい、殉教寸前の状態であった。

- ② エルサレムの神殿に近い。神殿でのユダヤ教の祭儀（動物の犠牲を捧げる）に戻るといふ誘惑は、現実のものであった。

4. この手紙が書かれた時期

- (1) 初期の教会教父の一人、ローマのクレメントは、紀元 96 年の書簡の中で、ヘブル人への手紙を引用している。
- (2) 13:23 テモテについて言及されている。テモテがパウロの伝道によって信者になったのは、紀元 50 年（使徒 16:1~3）。
- (3) テモテへの言及は現在形、よってテモテ存命中。
- (4) 受取人は第二世代の信者、かつ信者になってから教師になってもよい年数経過。
- (5) エルサレムの神殿の祭儀を現在形で記述。神殿が破壊され、祭儀が途絶えたのは、紀元 70 年。よって、この手紙が書かれたのは、紀元 70 年よりも前。
- (6) 3:17 著者はこの手紙を書いている時期が、十字架からやがて 40 年に近づいていることを暗に示唆している。十字架は紀元 30 年。
- (7) 12:26~27 著者は、地を揺り動かすことについて語る。26 節「このたびは」＝「今」 → 大きな事件が間もなく起ころうとしていることを示す。著者は、ユダヤ人たちがローマに対して反乱を起こす原因となる出来事が起き始めていることを示唆している。実際に、ユダヤ人に対する攻撃が行われたのは紀元 64 年から 66 年の間、これが紀元 66 年、ユダヤ人を反乱に決起させることになる。
- (8) 以上のことから、この手紙が書かれたのは、紀元 64 年と 66 年の間であると推定される。

5. 歴史的背景

- (1) メシア拒否とそれに対する裁き、その裁きからの救い
 - ① マタイ 12:22~32 聖霊を冒瀆する罪
 - ② マタイ 12:41~45 邪悪なこの時代
 - ③ マタイ 21:31~46 「放蕩息子」の解説、43 節「神の国はあなたがた（祭司長とパリサイ人をはじめとする当時の世代のイスラエル）から取り去られ、神の国の実を結ぶ国民（単数形、メシアを受け入れる世代のイスラエル）に与えられる」
 - ④ マタイ 22:1~14 7 節 「兵隊を出して、その人殺しどもを滅ぼし、彼らの町を焼き払った。」
 - ⑤ マタイ 27:3~10 エレミヤの預言＝エレ 7:32
 - ⑥ ルカ 11:50 「この時代は、その責任を問われる」
 - ⑦ ルカ 12:10 聖霊をけがす者は赦されない

- ⑧ ルカ 13:1~9 5節「あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」 9節「どうか、ことし1年そのままにしてやってください。・・・それでもだめなら、切り倒してください」
- ⑨ ルカ 13:34~35 「あなたがたの家(神殿)は荒れ果てたままに残される。」
- ⑩ ルカ 19:41~44 イエスは都のために泣かれた
- ⑪ ルカ 21:10~24 「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、・・・そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。都の中にいる人々は、そこから立ち退きなさい。いなかにいる者たちは、都に入ってはいけません。」
- ⑫ ルカ 23:27~31 十字架への道でイエスが語ったことば
- ⑬ 使徒 2:36~47 40節は、霊的な救いではなく、紀元70年の裁きからの救いを指す。当時の世代のユダヤ人にとっての洗礼の意義。イエスをメシアとして認め、その名によってバプテスマを受けることは、当時のユダヤ社会からの決別を意味した。→ 資産や持ち物を売って、いっさいの物を共有にした。
- (2) 当時の世代のユダヤ人にとって、マタイ 12:22~32 のメシア拒否事件がターニング・ポイント(これを超えると回帰不能となる地点)となった。同様の民族的事件は、旧約聖書にもあった。
- ① 民数記 13~14章 カデシュ・バルネア事件(13:26「カデシュ」、申 1:19「カデシュ・バルネア」)
6. この手紙が書かれた当時の状況と、手紙が書かれた目的
- (1) 反ローマ、愛国主義が強まる中で、イエスをメシアと信じる教会に対して、社会的な圧力がエスカレートして、迫害が起きる。
- (2) ユダヤ人信者の中に、次のような意見が出始めた。
- ① 迫害がおさまるまで、いったんユダヤ教に戻り、エルサレムの神殿での祭儀に参加し、ラビの指導に服そう。
- ② 迫害がおさまったら、また悔い改めて、救いをいただこう。(6:6「もう一度悔い改めに立ち返る」=新しい救い)
- (3) 著者は、この「新しい救い」という考え方に対して、そんなことをしたら、迫りくる民族的裁きに巻き込まれて、死ぬことになるかと警告する。5回にわたる警告は、いずれも迫りくる民族的裁きに巻き込まれて肉体の死を招くという警告であって、霊的な救いを失うというものではない。
- (4) 著者は、ユダヤ教に戻るのではなく、霊的な成長を目指そう(5:11~14、10:33~39)と勧める。また、背教の危険と戦おうと励ます(2:1~4、10:19~25)。